

淀川水系流域委員会 琵琶湖部会一般意見聴取試行の会（2003.5.25 開催） 結果概要

03.7.9 庶務作成

開催日時：2003年5月25日（日） 13：30～17：00

テ－マ：「これからの琵琶湖と川とダムを考える若者討論会」

場 所：大津商工会議所 2階 大ホール

参加者数：委員8名 他部会委員5名 意見発表者6名 一般傍聴者90名

1 試行の会の概要

公募によって選出された意見発表者6名に、各15分ずつご意見をうかがい、各5分程度委員との質疑応答が行われた。その後「若者の視点の特徴とは」「それをどのように社会参加の仕組みにしていくか」という論点をもとに、委員、発表者、一般傍聴者の間で意見交換が行われた。

2 はじめに（琵琶湖部会 嘉田委員）

これからの琵琶湖と川とダムを考える若者討論会、というテーマで特に若者を対象とした意見聴取の試行を行う。流域委員会の柱1つに、「幅広い意見の聴取」があるが、これまで流域委員会にはなかなか若者の意見が反映されなかった、あるいは意見そのものが出てこなかったという反省があり、本日の会となった。本日は若い方がそれぞれ生活の場でどのように河川や水と関わっているのかについて、自由に多様な意見を聞かせていただきたい。

3 意見発表者からの主な意見

金尾滋史氏（滋賀県立大学大学院）：「現在の琵琶湖・淀川水系において、学生として何が必要なのか、何が実践できることなのか」

- ・「国内移入種」として滋賀県に移住してきて、滋賀県民と県外の学生の琵琶湖に対する意識の違いを感じた。県民は琵琶湖を自分達の生活に密着した形で捉えているのに対し、県外の者はより感動をもって琵琶湖を捉えており、この価値観の違いは何かに見えるのではないかと思った。また、「犬上川プロジェクト」というサークル活動を通して見つけた学生の利点や可能性について話したい。
- ・学生が活動する際の特徴、利点として、1.社会的な立場にとらわれない行動や発言ができる。2.様々な専攻、学科の学生と交流がある。3.「国内移入種」が多く、新たな価値観を地域へ生み出すことができる。4.自由に行動できる時間がある。5.若さと行動力がある。以上の5点があげられる。
- ・現在、河川整備計画について様々な議論がなされているが、利害関係者や河川等に興味がある人にしか情報が行き渡っていないように思える。それは、琵琶湖や淀川に対する特別

な価値観を持たない人々の関心の薄さにも原因があるのではないか。

- ・学生が地元で発見した新しい価値観を地域住民へ伝えるとともに、研究者、あるいは社会人の卵として専門的な研究や提案を行政や様々な研究機関と共同で行うことで、これまでの行政と地域住民との関係に新しいつながりをつくることができる。
- ・「Think Globally Act Locally」という言葉があるが、国内移入種がその地域ごとに価値観を見つけ、それを地域で実践し、そこに新たに地域と地域ででき上がった成果を結びつける、という「Think Locally Act Locally Connect Locally」を提案する。そしてその結び役を学生ができるのではないかと思う。
- ・流域委員会の議論や提言は学生にもわかりやすいものにして欲しい。また、学生や若者も議論の場に参加できるようにしてもらいたい。

(主な質疑応答)

- ・サークル活動の課題について教えて欲しい。(委員)

学生は4年または6年で世代交代があり、そこで意思が引き継がれない場合がある。

意思をつなげるとともに足りなかったところは次の者が補っていく形で発展し続けることが理想的だが、なかなかそこまで意思が伝わらないというのが現状である。

(発表者)

- ・流域で生活する者は生活に密着する余り近視眼的なところがある。その一方で、流域外から来た者には無責任な面があるのではないか。どちらがより責任をもって客観的に流域を捉えることができると思うか。(委員)

そこで生活している住民に見えないものを外から来た者が補い、外から来た者には分からない良さや厳しさを生活住民が教えるべき。それぞれの立場でお互いに責任をとるとのことだと思う。どちらに比重がかかるかは地域によって異なるのではないか。(発表者)

市橋宏文氏(京都精華大学):「琵琶湖をはじめとする自然環境と私たちが共存するには何が必要か」

- ・1999年8月14日に神奈川県の大倉川で起こった事故(キャンプに来ていた人々が大雨とダムからの放水などによる急激な増水で流された)は、自然と人間の距離がある意味では縮みまた別の意味で開いたために起こった惨事と思う。縮んだ距離と言うのは交通手段の発達などにより気軽に自然の中に行けるようになったということ。他方、開いた距離というのは、本来、危険性に満ちた真の自然の姿に対する認識が薄くなっているということである。
- ・ダム建設において、100年確率という言葉を目にする。これには、運が良ければ何の災害も経験せずにそこに住み続けられる、というメリットがあるが、デメリットとしては、水害の経験を継承することが難しくなり、その100年に1回の大雨が降った場合、対処の仕方が分からず結果として大惨事になるのではないか、ということがある。

- ・伊勢神宮は20年を一つのサイクルとして遷宮を行っている。これにはその遷宮に関わる全てを経験として次の世代に引き継げるというメリットがある。水害ということにおいても、このような経験の継承があれば被害を最小限に食い止められるのではないかと。
- ・今後、私たちに必要なのは自然やあらゆるものとの距離を縮めて自分のものとする事、経験を通して知識を自分のものにしていくことだと思ふ。個人的には、小さな頃から親に連れられてNETSという河川調査をする団体の活動に参加してきたことが環境への興味を抱く貴重な経験となった。将来の世代にそのような経験を伝えることも重要であると認識している。

(主な質疑応答)

- ・NETSの活動のどのようなところを伝えたいのか。川と接することの楽しさはどこにあるのか教えて欲しい。(委員)

自然を体験するという事全て、つまり自然の中で川遊びをしたり、どこにどんな生物がいる等を調べる事全部が貴重な体験であったと思っている。(発表者)

- ・活動の中で、川にいる魚に変化が起きていることも感じたのではないかと。気になる場所はないか。(委員)

短い期間だと数ヶ月で、同じ場所を調査してもとれる魚の種類が全く変わっていたり、工事されて川の雰囲気が変わっていたりということを経験した。家庭排水がそのまま流れている汚い川を見てきているので、朽木などの山間のきれいな川が印象的だった。(発表者)

- ・小川でのブラックバスの発見の話があったが、小さい川での繁殖は考えられない。誰かが釣ってきたものを一時的に放流した等が考えられるが、どう思うか。(委員)

ほとんど琵琶湖の近くでしか見ることがなく河川で見たことに驚いた。おっしゃる通りではないかと考えている。(発表者)

最近山間溪流に外来魚が出現するという事はあちこちに起きている。アユなどの種苗放流に伴って入ってきたと考えられる。(委員)

北山泰三氏 : 「琵琶湖・淀川流域における水質および底質の浄化、保全について」

- ・一時期大阪の水は臭くてまずいと言われていたが、現在では高度な浄水技術で水道水は処理されており、また家庭用の浄水器やミネラルウォーターも普及し、飲み水に文句を言う人は少なくなった。しかし、そのことでかえって淀川の水質に対する世間の関心が薄れたと感じる。一方で水質の悪化は生態系に悪影響を及ぼし、生き物の少ない魅力のない川になり、ますます関心を遠ざけている。
- ・25年ほど前には、大津の辺りでは水面下にたくさんの小魚が群れており近くで泳いでいる人もいた。しかし、7、8年前から急に釣れなくなり、南湖のほとんどの場所で茶褐色の濁りが見られ、ヘド口の堆積で砂底が少なくなったと感じている。雑排水の処理不足による自浄作用、希釈効果の限界ではないか。河川のように流れが速くないので堆積物がたまり

やすく、それに伴った二次汚染や富栄養化も心配される。淀川、寝屋川、神崎川の下流でも生活排水や工業排水の影響かヘドロの堆積が目立ち、水質、底質ともにひどい状態である。

- ・現状では法規制に頼っても自浄作用に頼っても生物が快適に生息できる河川湖沼が復活するとは限らない。他県でもホテイアオイを使った浄化の試みなど、自然環境を回復しようとする様々な動きがある。専門家のアドバイスを仰ぎ、現状をよく把握したうえで長期的な計画をたて、また技術的な検討もしていくべきである。
- ・委員会は、負の遺産を将来に残さないという確固とした態度で無意味な自然破壊を防止し、河川に対する思いを代弁する存在であって欲しい。

(主な質疑応答)

- ・大阪の水はまずい、臭いという話があったが、今はよくなったのか。(委員)
よくなったと思う。活性炭処理等されていると聞いている。(発表者)
- ・水が比較的よくなった、またミネラルウォーター等が普及したことで川に対する関心が薄くなった、ということについてもう少し具体的に話してほしい。(委員)
大阪の水が臭い等のうわさがあった時には、一般の人にももう少しきれいにしないといけない、という意識が働いたと思うが、普通に過ごしていてもおいしい水が手に入るということで、淀川から水をとっているということ意識しなくなる気がする。(発表者)
- ・改善されたことで関心がなくなる。先ほどの100年確率の話にも共通する問題提起だと思うが、では大阪のその臭い水を、自分達の生活の帰結だから我慢しよう、と耐えられるか。(委員)
飲み水として考えると、耐えられないと思う。(発表者)
- ・ビオトープに対してどのようなイメージをもっているのか。河川工事にビオトープを採用したという例を挙げているが、具体的にはどのようなものか。(委員)
ある程度自然の流れに任せ、人間と自然が両方で作るものだと思っている。河川の適当なところに大きな玉石等を置くだけで、2、3年後には自然に砂が堆積し草が生えていったということ聞いた。(発表者)

石山一光氏(京都精華大学):「『つながり』の再生を目指す - 公共事業の問題点をめぐって - 」

- ・昨今、公共事業の問題が多く指摘されているが、本来公共事業とは、国民の幸せを向上させるために税金を使って何か事業をしようというものだと認識している。公共事業の問題点として、1.公共事業そのものの問題；建設地域での自然破壊やその必要性、財政負担など2.間接的影響、特に政治的影響があげられる。公共事業の中でも特に非難の多いダム建設、例えば丹生ダムについて見ると、まずその必要性に疑問が生じている。当初計画の柱であった利水の必要性は低くなり、治水効果についてはダム以外の方法がほとんど検討さ

れていない。このような状況でもあえて建設にこだわるのは政治的影響もあるのではないかと思われるが、残念ながら政治的な問題で私たちの目に触れる情報はほとんどない。

- ・日本は経済的に裕福で生活水準も高いと言われているが、公共事業をめぐる問題を考えた時、文化的、思想的な水準は低いのではないかと感じる。そのような人間が権力の大勢を占めている構造自体が問題であるが、一般市民が目先の利益・便益を追求する余り、このような構造が生まれたのではないかと思う。そこで、経済至上主義や権力の集中が原因となり現代人が失ったものを見直すことが、公共工事の問題を見直し新しい社会をつくりだしていくきっかけになると思う。
- ・失ったものとは、「つながり」であると私は考えている。本来つながっているべき人と人、人と物、人と自然、人と社会等のつながりが断絶してしまっていることが根本的な問題なのではないか。友人を思いやる、自然を大切にする、上流と下流の人がお互いの生活を考える等のつながりがなくなったために、くだらない公共事業だけが日本を救うと言う考えを生み出し、権力者は保身に邁進する状況となっている。
- ・今の日本を住みにくくしたのは大人たちである。大人たちが何十年も前に見た夢や希望を若い世代に押し付けないでほしい。大人たちの作った基準では幸せにはなれない。もっとシンプルにつながりを大切にできる世の中になることが自分だけでない全体の幸せをつくる方法だと思う。私は以前建築業界で働いており、会社の利益のみを追求するやり方を目の当たりにし、自分も参加もした。ただ批判するだけでなく、環境を悪化させてきた当事者として反省し、環境保全のための適切な判断や行動をし続けなければならないと考えている。

(主な質疑応答)

- ・若い世代が具体的に何をしようとしているのか聞きたい。(委員)

若者世代に限らないことだが、関心の低さや問題意識の低さが大きな問題であると思う。若者として、疑問を感じている者として、問題を認識しているという責任があると思っており、若者に限らず多くの人に提言をしていきたい、行動するのは個人であると思っている。(発表者)

- ・悪政、政治を変えたいという若者らしい意欲はないのか。(委員)

文句を言うだけで何もしないのは自分のポリシーに反するので、国政とは言わないまでも、何らかの形で世の中を変えていくためにできるだけことはしていきたい。(発表者)

- ・ご発言の内容は、私たちが若い頃には普通の意見であったが、おそらく今は少し乱暴に聞こえるのではないか。そのような若者からの発信が少なくなっていることが問題と感じる。(委員)

安東尚美氏(流域調整室):「天ヶ瀬ダムの再開発について」

- ・ダムの放流量増による治水効果と内湖再利用や森林の保全、遊水池や水田での貯留による

治水効果を比較した場合、河川管理者の結論としては、ダム放流量を 1500m³/s にすることに代わりうる手段はなく、昭和 36 年 6 月洪水を計画規模に引きのばして、水位上昇を 16cm 下げるためには、天ヶ瀬ダムの再開発が有効としている。しかし、16cm の水位低下は資料を見る限り、約 3m 以上琵琶湖の水位が上昇した場合の値である。

- ・天ヶ瀬ダムの放流能力の増強させるために、天ヶ瀬発電所や旧志津川発電所のトンネルを利用することを検討中とのことだが、下流の治水効果というより、ダム堤体の安全に効果があるくらいだろう。
- ・特定都市河川浸水被害対策法案では、避難訓練の実施や工事用の暫定調整池を恒久調整池にする等対策が盛り込まれている。豪雨による増水時やダム放流の危険さと治水を生活空間に取り込むことについて住民が知りたいと思うような仕組みづくりが大事だ。
- ・治水か環境か、という選択ではなく、治水も環境も農業も土地利用も含めた人間にとっての環境指標によって、トータルに評価していかなければならないと考えている。

(主な質疑応答)

- ・住民にとって、より近い治水にしていかなければならないという内容だったと思うが、もう少し詳しく説明して頂きたい。(委員)

わかりやすい治水にしてほしいと思っている。例えば、河川管理者が「ダムがあったから洪水が起きなかった」と説明する時には、そのことについてより詳細な説明が必要だ。(発表者)

- ・個人的な意見だが、自然が自ら要求した水域である沓瀬源・巨椋池を干拓した代償を人間は支払わなければならない。その代償について考えてこなかったツケが回ってきているのだらうとおも。そういった意味から言えば、単に内湖を復元するだけではなく、自然が要求する内湖を復元することが大切だと思っている。(委員)

干拓地に住んでいる人は、浸水する覚悟をもって住むことも必要だと考えている。現地で嵩上げした住宅も見えた。(発表者)

野田岳仁氏 (Youth Water Japan 代表): 『『これからの琵琶湖と川とダムを考える若者討論会』への提言; 1. 流域委員会に世代別委員会を設置 2. 『コミュニティの水を飲む』マイボトルキャンペーン』

- ・社会の中の若者の位置づけ、様々な物事を決めるときに若者の意見がどのように反映されるか、ということが私の活動の課題となっている。若者に何ができるかということを考えると、1. 自由な発想を持ち、面白い提案ができる、2. しがらみを持たないので関係者をつなぐ調整役やさらに若い世代へつなぐ橋渡しの存在になれる、3. 学生や社会人が主体であるので、文系、理系の研究者の卵など様々な主体が刺激しあい、うまくバランスをとって知的かつ文化的な提案をし得る、などが挙げられる。その中で、自分達にもすぐできることがあるのではないかという視点から、将来への責任を考えていくことが大事だと思う。また、若者は若者に受けるような手法等を持っている、ということもメリットとして挙げ

られる。

- ・今回「第3回世界水フォーラム」という国際会議があり、水に対する意識が非常に高まった。しかし、その後何をやるかという具体的な動きにはなかなかつながっていないと感じている。そこで、この淀川水系流域委員会でも、流域から考え直すという意味で水フォーラムのフォローアップが進められるのではないかと考えている。そのために、以下の2つの提案をしたい。

1. 淀川水系流域委員会に世代別の部会として若者部会を設置

流域委員会は、様々な分野からは委員が選出されていると思うが、世代の偏りが強く、若い世代の意見が落ちていると感じる。住民参加部会の中に若者部会だけでなく、世代別で主婦層や子ども部会等を設置し、議論することを提案する。若者主催のNGO等では意見を反映させられる場がなかなかないので、そのようにオフィシャルな形で参加プロセスが明確になると若者も意欲をもって参加できると思う。

2. 「コミュニティ（地域）の水を飲む」マイボトル（水筒）キャンペーン

これまであまり参加のなかった多くの若者や主婦層なども巻き込んでいくべきであり、そのために、わかりやすく誰でもできるようなイメージ戦略的キャンペーンを展開する必要がある。そこで、輸入された海外の水を飲むことや環境負荷の高いペットボトルの消費に対する代替案として、マイボトル、水筒を持ってコミュニティの水（水道水や神社の湧き水等）を飲むことを提案する。それだけでは若者には受けないので、街中のカフェで入れられる等企業の方々とも相談しながら考えているところである。気軽にコンビニでエビアン等のペットボトルを買っていても、自分の飲んでいる水がどこから来るのか意識せず、その水源との心理的な距離が広がってしまう。

（主な質疑応答）

- ・流域委員会の平均年齢が高すぎるというのはもっともな意見と思うが、世代別部会に分けることには賛成できない。様々な専門の方や世代の違う方々と一堂に会して話することで視野も広がり勉強になる。様々な世代、立場の人がそれぞれの立場を主張し合い、お互いを理解していき、一緒に今後を考えていく方が立場でグループを作るより意義が大きいのではないか。（委員）

最終的にはそのようになればいいと考えているが、現状では若者がそういった議論をするのが難しいと感じており、今のような提案をさせてもらった。（発表者）

- ・住民参加部会に入ると住民の意見の反映方法ということに限った議論になるので、より広い、例えば利水や環境、治水といった視点をもって活躍してほしい。（委員）

では、利水、治水、環境の中にまた世代別部会を設けるか、あるいは妥協案として若い委員を増やす等の仕組みを確立してほしい。（発表者）

- ・流域委員会の提言を見て様々な意見が来ているが、提言だけ見て文句を言わずにまず委員会の傍聴に来なさい、と言いたい。なぜ若者の傍聴がないのか、それは大きなキャンペーンがなかったことが原因なのか。（委員）

水フォーラムで、水問題に対する意識が高いのを感じたが、その中でも流域委員会の存在は知られていない。若い人に届くメッセージは投げられていなかったと感じている。(発表者)

- ・若い人の現状についてもう少し聞きたい。また、委員会にそれほど期待することはないと思う。大事なのは自分達場で活動することで、そこから委員会や河川管理者とやりとりしてはどうか。(委員)

本音としては、私も若者がもっと頑張ってもらいたい、と思う。水フォーラムがきっかけとなり若い人の参加もあったが、一つのブームに過ぎないという感もある。今回、ユースの水フォーラムを通して、関連イベントで1500人集まったのは一つの大きな成果だと考えている。その中ですぐできることとして提案したマイボトルキャンペーンを持続していくためにも、流域委員会と連携がとれればと思う。また、私はこれまでNGOで活動してきて、河川事業や開発の問題等に関わろうとするとき、政府と協働するための窓口がないと感じてきた。だからこそ、この流域委員会がその窓口になってもらえるのではないかと思い提案した。(発表者)

4 自由討論

「若者の視点の特徴とは何か」「そういった若者の視点や特徴をどのように社会参加の仕組みに結びつけていくか」という論点をもとに、委員、発表者、一般傍聴者の中で意見交換が行われた。

中村拓氏(一般傍聴者): 大半の人は環境問題について深い関心を持っていないというのが現状だと思う。そういった興味のない方々へのアピールについてどう考えておられるのか、お聞きしたい。私は農学部森林科学科で学んでいるため、先ほど説明された野田氏の活動内容についても知っているが、一般の方々は、そういった情報を得ることができない。

嘉田委員: 2つめの論点に関連しているご意見だと思う。自由でしがらみのない、横つなぎができる可能性のある、専門分化していないといった「若者の特徴」を強みだと思われるかどうか、ご意見があればお願いしたい。

金尾氏(発表者): 若者は自由な意見を言えることが強みだと思う。しかし、その強みを若者自身が知らない。私の場合は、サークルや地域活動の中で意見を言うチャンスを得ることができたけれども、多くの人にはチャンスが巡ってきていないのではないか。自分の意見を言えば、自分の強みに気がつくことができる。そのチャンスを自ら勝ち取るのか、それとも誰かが与えるのかは、個々のケースによって違ってくると思うが、最初はチャンスを与える方が大切だと思う。

市橋氏(発表者): NETSの活動には、物心がつくつかないかぐらいの頃に、両親に連れられて参加したのが始まりだった。

村上委員: 若いときに、自分が動くことで物事が動いていくという感覚、自分で何かをやっ

て達成するという体験がとても重要で、子どもを伸ばすことができるそういった場を地位なり家族が出発点となってつくっていくことがポイントになってくる。

嘉田委員：環境に関心を持たない方々にどのようにアプローチしていくか。「環境問題」という言葉を使った途端に関心がなくなってしまうという面があるが、もっと他の視点があるのではないかと思う。安東氏は先ほど「治水についてわかりやすい説明を」と発表されていたが、提案があればお願いしたい。

安東氏（発表者）：自治体によって差が大きい。例えば、城陽市では住民にもわかりやすいような浸水想定区域図を配布し、防災訓練等も実施しているが、多くの自治体では雛型に従って作られたものしか用意されていない。また、河川管理者は治水対策の必要性について、イベント等を通じて、わかりやすく説明していく必要がある。

嘉田委員：わかりやすさというのは、社会参加の仕組みづくりのキーワードになる。野田氏は、水フォーラムの出発点として音楽祭を開催されたが、その発送について説明を頂ければと思っている。

野田氏（発表者）：奄美大島の島歌に込められているメッセージが大事だと私たちが伝えるよりも、歌で感性に訴えかける方が何十倍という力になると感じて、多くの人に伝える手段として音楽や映像を使った。環境に関心のない方々にどのようにして伝えていったよいか、私も常に考えている。これは吉野川可動堰の住民団体の例だが、マンガでわかりやすく説明された子ども用のパンフレットの裏側に親に向けたメッセージが書かれており、家に持ち帰った子どもを通じて親に伝わっていた。戦略的に、良い意味で相手をはめていかなければならないし、そのためには、自分でメディアツールを持ち、情報が集まってくるようなスペースを持つことが重要だと思う。

石山氏（発表者）：興味を持っていない方々の共感を得るためには、難しい言葉やデータは必要ない。若者や年寄り、経験者や未経験者といった垣根を取り払って、自分の言葉で、笑いながら楽しみながら共感していければ、何かが動いていくのではないかと思っている。過去に建築会社で勤務していた際に、ゴミ問題を解決しようと行動を起こした時、しがらみや足かせがあって何もできないということもあった。今、学生の立場になったときに、確かに自由に動きやすいと感じる。しかし一方で、組織に属している安心感、バックボーンがあるという安心感も確かにあるだろうと思う。

村上委員：私も組織のしがらみにとらわれている面もあるが、自分のスタンスをはっきりすれば、どの組織に属そうが大丈夫なのではないか。

野田氏（発表者）：常に、自分の中でスタンスを明確にしながら発言していくことで、しがらみから解放された意見が言えるのではないかと思っている。

佐山敬洋（一般傍聴者）：若者部会ができたとすれば、部会での議論が環境や生態系に議論が集中してしまうのではないかと思う。治水や利水、ダムについて考えることができる人が必要だ。

細川委員：若い方には、自分たちには自分たちの価値観がある。これから先の人生で環境とどう関わっていきたいのかをはっきりすることが大事だと思う。

佐山敬洋氏（一般傍聴者）：メディアに目を向けることは間違いではないが、意識しすぎることには疑問がある。流域委員会は、流域の住民が治水や環境について考えていく場なので、必ずしもメディアに訴えかけていく必要はないと思う。

野田氏（発表者）：私がメディアと言っているのは、マスメディアのことではなく、自分たちが伝えたいことを発信するための手段のことだ。マスメディア自身がしがらみを持っているため、事実を伝えられるかどうか疑問をもっている。

酒井隆氏（一般傍聴者）：子ども水フォーラムの子ども宣言をもう一度、しっかりと確認する必要がある。それから、琵琶湖の汚染の問題を考えると、農・工・住を再度見直さなければならない。流域の住民の生き方が、次の世代の子どもたちへのメッセージになる。

瀧健太郎氏（一般傍聴者）：流域委員会の提言には、河川に興味を持っていない人や河川から遠ざかってしまった人の意見、地元の意見が入っていない。それでは、新しい理念がみんなものにはならないのではないかと思う。地元の人、自分たちの家のまわりのことが、流域委員会で提言されて、それが新聞に載って、面食らっているのではないか。もう一度、提言を作る段階に戻って考える必要があるのではないか。

中村拓氏（一般傍聴者）：環境、治水、利水は難しく興味を持つところではないという人が多いと思う。やはり、直接的なアプローチだけでは受け入れられないと思うので、スポーツで自然に関わっている人たちにマナーの向上を呼びかけることで自然環境への意識を高めてもらう等、間接的な手法というのは考えられないか。

桑木光信氏（一般傍聴者）：地元の環境に対する問題意識を向上すること、日本で起きていることと同じ問題が起きないように世界の国々と連携を取っていくことが大事だと考えている。

野田氏（発表者）：本日の会のアウトプットは、どのようにして取り扱うのか。

嘉田委員：本日の結果はホームページ等で公開し、今後具体化する際に部会や委員会で議論することになるだろう。

最後に（琵琶湖部会 川那部部会長）

住民の方々の意見を聴くだけでなく、反映させるためにどうすればいいのか。公聴

会を開催するだけで、反映できるとは到底思えない。本日の会は確かに公聴会ではないが、公聴会を越えているものかどうかはわからない。どうすれば、意見を反映することができるのか、これからもやり方を変えながら、こういった会を開催していく必要があると思っている。

また、先日の委員会で「一般意見の聴取反映方法について」という提言が示されたが、これについてのご意見も是非頂きたいと思っているので、よろしく願いいたしたい。

以上